

ワークショップ

「IBD 診療におけるカプセル内視鏡」

司会 緒方 晴彦（慶応義塾大学医学部内視鏡センター）
大塚 和朗（東京医科歯科大学光学医療診療部）

司会の言葉

IBD は、若年者を中心に患者数が増加している難病であるが、近年さまざまな治療法が登場してきた。早期の発見と適切な対応により予後の改善が期待できるが、正確な診断はその前提である。また、寛解導入後も長期にわたる寛解維持治療が必要であり、これを過不足なく行うためには、十分なモニタリングによる病状評価が不可欠である。これに対し、低侵襲に腸管を検査できるカプセル内視鏡の高い有用性が IBD 診療において評価され始めており、診断や病状評価に重要な機器と考えられる。本セッションにおいては小腸ならびに大腸カプセル内視鏡の適切な活用法について、経験や工夫など多数の報告を期待する。